

マタイ福音書講話（3）

マタイ 2章 1～12節【占星術の学者たちが現れる】

1節「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て言った。」

イエス様が生まれたとき、東の方から占星術の学者たちがイエス様を拝みにやってきました。「占星術の学者」と訳していますが原語では「マゴイ（マギ）」といいます。このマギとは哲学、薬学、自然科学、天文学の知識があり、将来を予想したり、夢を解いたりもしました。このマギからマグス「魔術師」という言葉が生まれます。しかし本来のマギは科学者、真理の探究者であって皆さんが知っているレオナルド・ダ・ビンチのような人だと思っただけいいでしょう。もともと宇宙とか自然界は「神のアイコン」といわれています。アイコンとはギリシャ語で「イメージ」という意味です。この世界は神に創造されたので、神の力、神の美、神の善、神の知恵が現れているのです。だから神様が自然界を用いて人間にメッセージを送ろうとすることはありえるのです。

2節「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」（マタイ 2：2）

「わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」（マタイ 2：2）とあります。エルサレムから東方と云うとペルシャ、バビロン、アラビアの方角になります。イエス様が生まれた時、天に特別な星が現れました。その星を見て、マギたちは「世界の王」が生まれたしるしだと思ったのです。では、なぜ彼らのような外国人が訪ねてきたのでしょうか。この地域は昔ユダヤ人が捕囚となっていた国です。その間にユダヤ人のメシアを待望する信仰がこの地域にかなり広まったようです。そしてイエス様の生まれる頃には、世界中に新しい王を待ち望む気運が満ちていました。このことはいろんな歴史家が書いています。スエトニウスは「東方諸国一帯には昔から揺るぎない信仰があった。それはその頃、ユダヤから世界を支配する者が出るということであった。」（「ヴェスパシヤヌス皇帝の生涯」）と書いています。旧約聖書の中にもこの不思議な出来事は預言されていました。

・「あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。…国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。」

（イザヤ 60：3）

・「ミディアンとエファ（アラビアの地域）の若いらくだがあなたのもとに押し寄せ来る。シェバ（アラビアの地域）の人々は皆、黄金と乳香を携えてくる。」（イザヤ 60：6）

・「シェバやセバ（エチオピア）の王が貢ぎ物を納めますように。すべての王が彼の前にひれ伏し、すべての国が彼に仕えますように。…彼にシェバの黄金が捧げられますように。」（詩編 72：10、11、15）

イザヤは「王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む」と、マギたちを王として預言しています。ペルシャ、バビロン、アラビアというかつてイスラエルを支配した外国人たちが、世の終わりにメシアの元に帰ってきて仕えるというのです。やがて彼らにはメルキオ、カスバル、バルサザールという名前もつけられました。

3節「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。」これを聞いてヘロデ王は不安を抱きました。自分以外の王が生まれたなら、自分の王座が脅かされると思ったのです。このヘロデという人はユダヤ人ではなくエドム人です。エドム人なのにどうしてユダヤの王になったかというところ、ローマ皇帝に取り入ったからであり、政治的手腕にたけていました。とても猜疑心が強い人で、自分の子どもや母親まで自分の王座を脅かすのではないかと疑って殺しています。

●【誰を王とするか】

この物語には「王」という言葉が5回も出て来ます。「ユダヤ人の王イエス」と「ヘロデ王」が対比されています。そしてここに登場する人たちを見ると、大きく二つに分かれています。まことの王に仕えるマギたちと、偽りの王に仕えるエルサレムの民、祭司長、律法学者たちです。言い換えるなら、上を見て生きる人たちと、下を見て生きている人たちです。上を見て生きるとは神を仰いで生きる人たちです。下を見て生きる人とは、人を恐れて生きる人たちです。上を見て生きるマギたちは落ち着いています。星も静かに輝いて彼らを導きます。彼らはまるでレールの上を走るように、スーと来て、スーと帰って行きます。その行動に無駄がありません。そして必要な時に、必要な助けが現れます。ところが、下を見て生きている人たち、人を恐れて生きる人たちはバタバタしています。実に騒がしい。そしてそのすることがすべて無駄になります。ヘロデなどはイエス様を殺そうとして多くの幼子を殺害しましたが、一切無駄でした。律法学者たちの聖書の知識も無駄になりました。彼らはメシアがどこに生まれるのかを知っていたのに礼拝に行きませんでした。上を見て生きる人、神を求めて生きる人たちは実に楽しそうなのです。「星を見て喜びにあふれた」（11節）とあります。さっと身を翻して星に従います。真理を求める人は、真理に従います。そして「その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ」（マタイ 2：8）という王の言葉を無視してさっさと帰ってしまいます。まことに自由です。ヘロデを恐れず、従わず、聞きません。ヘロデを恐れないということは「死を恐れない」ということでしょう。一方、下を見て生きている人たちに

はいつも「不安」(3節)があり、「怒り」(16節)があります。彼らはいつもヘロデ王に怯え、死の恐怖に縛られています。神を仰いで生きる者には自由があるということです。「真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネ 8:32)とイエス様は言われました。またパウロも「私たちは真理に逆らっては何をする力もなく、真理に従えば力がある。」(Ⅱコリント 13:8)と語っています。聖書は、あなたは誰を王としていますか？誰に仕えますか？と問うているようです。私達もマギたちのように自由に生きたいと思えます。

4～6節「王は民の祭司長や律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。ユダの地、ベツレヘムよ。お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

ヘロデ王は、祭司長たちや律法学者たちをみんな集めて、メシアに対する情報を知ろうとしました。祭司長たちや律法学者たちは、旧約聖書ミカ書 5:1 を引用して、ベツレヘムに生まれることを告げます。神様は救い主がどこに生まれるかは知らせましたが、いつ生まれるのかは知らせませんでした。場所は教えました、時は教えなかったのです。時を知っていたのはユダヤ人ではなく、外国人でした。こうしてユダヤ人だけに真理を知らせるのではなく、外国人にも知らせたのは、「互いに学び合いなさい」ということを教えているのです。キリスト教徒だけが真理を握っているのではありません。もしそうなら高慢になってしまうでしょう。また、外国人のマギたちは聖書の多くの知識はありませんでしたが、メシアに対する信仰があり、遠くから礼拝するためにやってきました。ユダヤ人たちは聖書の知識はあり、メシアのごく近くにいましたが、礼拝に行きませんでした。知識によって人は救われるのではなく、実践によって救われるのであることを教えています。

7～8節「ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、『行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう』と言ってベツレヘムへ送り出した。」

マギたちをひそかに呼んだのは、彼らを利用してメシアの居場所を探し当てて殺そうという計画があったからです。「星の現れた時期」とはいつでしょう。ヘロデがこの後、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺したのをみると、2年前～1年前に星が現れたことが分かります。つまりマギたちはイエス様が生まれてすぐに来たのではなく、一年か二年後にやって来たことが分かります。実際「家に入ってみると」(11節)とあるように、既にイエス様の家族は家畜小屋ではなく、家にいます。

9～10 節「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先だつて進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。」

マギたちが王の命令を受けて出かけると、東方で見た星が再び現れ、彼らをイエス様のいる家まで導きました。マギたちは最初ユダヤ人の王であれば宮殿に生まれるだろうと思ひ、ヘロデに尋ねました。人間の思い込みで行動する時、神の導きの光は見えなくなります。天を見上げて旅をしていた彼らも、時々地上を見て生きてしまったようです。しかし、いくら地上の者に聞いても、彼らは救い主の元には辿り着けませんでした。結局、彼らを救い主の元に導いたのは神が動かした天の星でした。マギたちを導いた「星」は、とても不思議な星です。星は西から東に動きます。しかしこの星は東方から西方に動き、さらに南下します。また、消えたり現れたり、先だつて進んだり、止まります。こんな星があるのでしょうか。教父たちの中には「これは自然界の星ではなくて、輝く天使が導いたのである」という人もいます。

「わたしは、間もなくもう一度、天と地を、海と陸地を揺り動かす。諸国の民をことごとく揺り動かす、…」(ハガイ 2 : 6～7) 神の命令によって神に造られた一切の物は動きます。御子が生まれた時、天の父なる神は、天においては星を動かし、天使を動かしました。地においては、皇帝アウグストゥスを動かし、東方の学者たちを動かし、羊飼いたちを動かしました。神が言葉を発せられるとみな動くのです。神の言葉を聞いて動く人と動かなかった人がいることが分かります。

昔は星がイエス様のところに導きましたが、今私たちがイエス様のところに導くのは聖書です。聖書が星なのです。学者たちが星を見て旅をしたということは、上を見ながら旅をしたということです。彼らは星を中心とした生活スタイルになっていましたが、私たちもキリストを中心とした生活スタイルを送っています。明日は礼拝だから早く休もう、明日はお祈りがあるから早く帰ろうと思ひます。日曜日に仕事や娯楽に誘われても、礼拝があるので行けませんと断ります。日曜日を中心にして一週間を考えています。クリスマスや復活祭を中心にして 1 年の生活は回っています。私たちのライフスタイルの中心は、キリストであり、教会であり、聖書なのです。物の考え方は聖書をベースにしています。世の中の人は何を思い、何を考え、どんなことが流行ったとしても動じませんし、何とも思ひません。私たちの考え方は聖書が中心だからです。私たちが毎週、教会に帰ってきて聖書に聞いて生きようとする時、あなたは天を見上げて旅をしているのです。

11 節「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。」

幼子イエス様は、いつも母マリアと共にいます。イエス様は母なる教会と共に

おられることを教えています。教会は母マリアの型です。イエス様と教会はいつもセットなのです。

「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」彼らは宝の箱を開け黄金、乳香、没薬を献げたとあります。黄金は王に、乳香は神に祈る時に燃やすお香ですから神性を、没薬は死者の防腐剤として使用するものですから、死を意味しています。つまりキリストは王であり、神であり、死ぬために来た方であることを意味しています。

12節「ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。」

クリスマス物語というのは、旅をする物語が多いのです。ヨセフとマリアは住民登録をするためベツレヘムまで旅をしました。マギたちも星に導かれて長い旅をしてきました。羊飼いたちは野原を旅します。ヘロデに命を狙われてエジプトに逃げてゆく時もヨセフとマリアは旅をしました。クリスマスは旅物語でいっぱいです。このことは「人生とは旅である」ということを教えているのです。旅にはいろんな旅があります。マギたちの旅は真理を求めての旅でした。ヨセフとマリアの旅は危険から逃げる旅でした。羊飼いたちの旅は、慰められるための旅でしょう。マギたちは真理を求めて人生を旅し、真理であるイエス様と出会って拝むと、さっさと別の道を通して自分たちの国に帰って行きました。ここに拝むだけで帰ってしまう人がいます。ここには「拝む」という言葉が三回（2、8、11）出て来ます。今年の降誕劇でも何回も見ましたが、日本人にはなじみのない動作で、ぎこちなくみえます。中近東の人たち、中近東の教会では当たり前の動作です。クリスマスとはXmasと書きます。Xとはキリストスであり、masとはミサ（礼拝）のことであって、キリスト礼拝の略語です。クリスマスの本質は拝むこと、礼拝することにあるのです。このことは人生とは神と出会うための旅であり、神を礼拝したら、その目的は果たしたことになることを教えているのです。朝祈りに来ると、何か一日の仕事が終わったような感覚になるのは、それを教えているのではないのでしょうか。

「彼らは別の道を通して自分たちの国に帰っていった」とあります。別の道とは、彼らの生き方が変わったということです。彼らはキリストに出会って変わりました。

●コワートという心理学者が、人は人生で三人の人に会わなければいけないといっています。

1. 理想のような人—「あなりたい」と思う目的が出来るからです。
2. 双子のような人—同じ苦労を共にした人と出会うことで、自分の思いが分かってもらえ、慰められるからです。
3. 鏡のような人—自分の成長を映してくれるからです。

●地下鉄サリン事件を起こし、全部で25名以上の人を殺害した、オウム真理教の教祖麻原彰晃は、小学校のころ教会学校に通い、中学時代はベトナム戦争の報道に触れ「正しく生きる」とは何かを考えたといいます。そして20歳の時、父を亡くし「死」について考え、大学卒業後、世界十数カ国を4年かけて自分探しの旅へ向かい、やがてオウムに入信しました。

カルトにはまってしまったら、家族や友人の本物の愛がなければ、抜けることはできません。アググスティヌスは『人間はどんな偽りの愛にも、ひきずられるほど愛に飢えている』と言いましたが、本当の愛だけが人を自由にし、その人を救ってくれます。誰に愛されるか？誰と出会うか？どんなものに導かれるかが人の生涯を決定するのです。